

# 紹介

## シンガポールの医療と看護

— グローバルな医療をめざすアジアの小国 —

元シンガポール国立大学病院

志賀晶子

呉大学看護学部

平岡敬子

キーワード：シンガポール，国際看護

### ■ シンガポールという国

シンガポールはマレー半島の南端に位置する人口400万人足らずの小さな国である。しかし、1965年に独立して以来、その経済成長はめざましく、アジア NIES (Newly Industrializing Economies) の一つとして、東南アジアの経済を牽引する国となった。シンガポールの保健指標を概観しても、出生1,000に対する乳児死亡率は3.8と低く、平均寿命は男性75.2年、女性79.3年であり、欧米諸国と変わらない。主な死因は、悪性新生物、心臓病、脳血管疾患であり、これもまた日本人の主要死因と変わらない。2001年、シンガポールは TIME 誌で最もグローバルな国として紹介され、医療においてもその国際性は顕著である。

シンガポールは、かつて、イギリスの植民地であり、独立後も教育、医療にイギリスの影響を受けている。人口の構成は、中国系シンガポール人が7割で、残りの3割はインド系、マレー系で構成されている。日本人は、駐在員などとして約3万人が住んでおり、外国人の中ではイギリス人と同様に多く、この国の経済や文化に多大な影響を与えている。

筆者の一人は、1999年から2001年末までの約3年を、シンガポール国立大学病院 (National University Hospital : 以下、NUH と略す) の国際部に所属して、日本人を対象とする部署に勤務した。NUH は900床のベットと第3次救急施設

を持つ、シンガポール唯一の大学病院である。医療の国際化の中、またシンガポールに在住する外国人として最も多い日本人に提供する医療は、日本語でサポートする必要があると NUH のビジネス開発部が発案し、日本人看護婦が雇用されるに至った。そこでの仕事の内容は、電話、ファクス、メールによる医療に関連する問い合わせから、診療の予約、診療時の通訳、出産前の妊婦に対するマタニティ・ツアー (病院案内)、出産時の付き添い、緊急搬送の対応、救急時の対応、そして、年4回行われる日本語による講演会の実施と見学案内用の健康教育に関する資料の作成等であった。

### ■ シンガポールの医療

シンガポールの医療は、政府保健省が管轄しているが、保健省の下に国全体の病院を東側、西側で大きく二分する運営母体がある。それは、病院間での競争を促し、医療の質を向上させることを目的として、2001年に設置された。ここには公立病院の院長がローテーションで配属し、専門医師も行き来している。NUH は西側の運営母体である「National Health Group」に属しており、日本のように大学の医学部の附属病院として運営されていない。シンガポールでは、イギリスと同様に家庭医 (General Practitioner) と呼ばれるプライマリ・ヘルスケアを担当する医師がおり、患者はまず、家庭医にかかり、必要があれば、

連絡・別刷請求先

ひらおか けいこ

〒737-0004 呉市阿賀南2-10-3 呉大学看護学部

そこから専門医のいる病院へと紹介されるシステムになっている。医療保険はCPF（Central Providence Fund：中央積立基金）と呼ばれる積み立て預金制度がある。国民は、国への投資（家などを購入する際の頭金となる）、年金、医療費と3つの積み立てをしており、医療費については、医療積みたての部分から、自分の希望する額を国の規定内で下ろして、支払う制度となっている。治療によってはCPFが使えず、実費を支払わなければならないものもある。例えば、国は3人目までの出産費用は援助するが、4人目は支給しない。4人目を出産する場合は、医療費が自己負担となり、CPFから支出することは許可されない。しかし、人工妊娠中絶の費用はCPFから下ろして使える。これは、政府による「人口政策」の目的と一致しているために、CPFが使えるのである（2002年1月現在）。一般に、医療費が高額であるため、多くの人は、CPFとは別に独自の医療保険を購入して、両者を併用して医療費をまかなっている。

## ■ 国際的な医療施設

シンガポールの教育は英語で行われ、多くの医師は欧米に留学する。海外で医師免許を取得し、かつ専門医師の資格も得るため、シンガポールの医師には欧米でも医師と認められる有能な者が多い。また、看護婦はフィリピン、技師などはオーストラリアや欧米の資格保持者が、外国人スタッフとして雇用されていることが多く、病院事態が国際化している。シンガポール自体が多民族国家であり、海外からの患者も多いことから、病院食は西洋、中華、ムスリム食と必ず3種類のメニューが用意されており、毎日、患者は好きなものを選択することができる。

バス、トイレ、付き添い者のソファベッド付きの一般個室から、4床までの病室には個人のベッドサイドに直通電話とテレビがヘッドフォンといっしょに設置されており、新聞は無料で配られる。人口が380万人と限られているため、病院間の患者獲得競争は激しい。私立病院では、近隣諸国（インドネシア、マレーシア、バングラデッシュ、ミャンマー、カンボジア、ベトナム、スリランカ等）から患者を確保するために、現地に営業担当者を送ったり、医師と連携しながら患者をシンガポールまで連れてきたりしている。その場合、営

業担当者が空港までの送迎をしたり、ホテル並のサービスを提供するプライベート病棟を設置したりしている。中には、東南アジア諸国の首相や政府関係者が来ることもあり、執事やメイド付の病棟までを用意しているところもある。但し、これらの外国人患者は、東南アジアの一握りの非常に裕福な者に限られていることは言うまでもない。

また、開業医による歯科クリニックも24時間体制を採用しているところもあり、これらのクリニックでは歯の問題があれば、いつでもホットラインに電話をして、相談することができる。日本人のために通訳を設置しているクリニックも多数ある。公立病院でも国際部を設け、海外からの問い合わせに対応したり、徐々に外国人に対する特別サービスも増えている。というのも、外国人はシンガポールの国民とは異なり、高額な医療費を支払うため、病院側としては経済的なメリットがあるためである。

シンガポール政府は、欧米の有名な医療施設との協力事業を推進している。NUHはアメリカのジョーンズ・ホプキンスがんセンターと提携し、“Johns Hopkins National University Hospital Cancer Center”を設立した。このセンターでは、ジョーンズ・ホプキンスのアメリカ人医師と看護部長が中心となって、アメリカの最新鋭のがん医療をシンガポール人スタッフとNUHの施設を利用しながら、提供している。他の公立病院でもメイヨークリニック、スタンフォード大学医学部などとの共同事業を開始している。

## ■ シンガポールの医療の特徴

### 1. 医療従事者の教育

シンガポールには、シンガポール国立大学に医学部があるのみで、私立大学には医学部、看護学部はない。看護教育は看護学校行われ、3年間の教育過程を修了し、国家試験に合格した者が看護婦（Registered Nurse）として登録される。現在、約5,000人の医師と15,000人の看護婦がこの国の医療を支えている。それ以外の医療従事者については、シンガポール国内には放射線技師などの技師の養成施設はなく、外国人労働者や海外で資格を取得したシンガポール人を採用している。

### 2. 私立病院の経営

私立病院は株式会社として経営されており、医

師はその会社である病院の一角を借りて、開業する方法をとっている。したがって、病院組織内では、セクションごとの横のつながりがなく、研究のための施設もない。医師の開業場所を一つ一つの場所をクリニックと呼び、医師が各自で独立経営をしている。これらの病院は、一般家庭と契約をしている家庭医からの紹介患者も受け入れている。個々の医師の診療を受けるには、まず医師を選択し、予約または紹介状を持参して診療を受ける。医師が検査や手術を必要とする場合には、所属する病院の設備をやはり、「借りて使う」という形になり、検査や手術のための医療費は診療費とは別に請求される。また、各種の映像検査や臨床検査も外部に発注するという形態をとっている。

### 3. 慢性的な看護婦不足

医師のレベルは高くとも、医療を支える看護婦や技師の数は極端に少ない。看護婦が少ないのはまず、イメージの問題がある。この国では、結婚している女性のほとんどがフルタイムで働き、家事や育児は外国人労働者のメイドを使っているため、人の面倒を見る看護職はメイド職に近いという印象がある。また、経済成長が進む中、あえてきつい労働を強いられ、そのわりには給料が安い。看護婦になりたいという人材は激減している。数年前は、政府がテレビコマーシャルを使って看護学校への入学者を募集していた。現在、シンガポールの若い看護婦の多くは、看護不足に悩む欧米に行き、彼らの代わりにフィリピンや中国の看護婦が働いている。労働力の輸入のために公立病院の看護部長が、自らこれらの国々に出向き、求人活動を行っている。これらの出稼ぎ看護婦は、昇進はほとんどできず、出身国よりはるかに高い給料ではあるが、シンガポールの中では非常に安い賃金で労働し、尚かつ仕送りまでしている。外国人看護婦の流入はシンガポールの看護の質にも影響を及ぼしている。

看護不足のために病棟を閉鎖したり、クリニックの運営時間を短縮したりする病院さえある。看護教育は看護学校で行われるだけで、大学卒の資格が欲しい看護婦は、主にオーストラリアの大学の通信課程で学士を取得している。このような中で、看護教育の向上や看護の質の改善は非常に難しく、看護教育者は常に苦難に立たされている。

## ■ 結 語

国土が非常に小さく、多民族国家であるシンガポールと日本とを単純に比較することは難しいが、その小ささゆえにシンガポールの医療は、日本よりもはるかに進歩的で、国際化している。日本でも欧米に留学をする医師や看護婦は増加しているが、海外で通用するレベルの人材は少ない。日本の医療のレベルは高度ではあるが、果たして欧米人が日本の病院で医療を受けるだけの国際的な運営レベルになっているだろうか。これだけ世の中が国際化しているにもかかわらず、日本の病院は、国際水準から程遠い位置にあるような気がしてならない。医療に国際化、英語は必要がないと言ってしまえばそれまでであるが、有名大学病院でも国際的に通用するレベルの病院施設は少ないのではなかろうか。例えば、英語が話せる医師や看護婦は一握りであり、医療従事者以外の病院スタッフの中で外国人に対応できる人材は稀であろう。また、外国人患者の文化を理解して、食事を配慮したり、外国人患者が療養しやすい環境を備えた施設はどれくらいあるだろうか。

シンガポールの国立大学医学部では、毎年、日本の医学部から学生が短期留学をし、英語での医療を勉強するプログラムを持つところが数校ある。一方、看護の方は、筆者が知る限り、シンガポールへの修学旅行中の日本の看護学生が、観光の合間に数時間、病院の見学をする程度であった。日本を含むアジア各国の看護関係者の多くは、欧米の看護をめざしており、非常に欧米思考が強い。それはある意味当然なことではあるが、アジアの一角にシンガポールのような国があり、そこでは国際的に通用する病院で医療が提供されていることを伝えたい。

シンガポール国立大学病院のそばに、古いコロニアル風建築のアレキサンドラ病院がある。そこは第二次世界大戦中、日本軍が襲撃し、医師、看護婦、患者を皆殺しにしたところである。そのような歴史を過去にもつ国の人々が、シンガポール在住の日本人のために医療を改善しようとしていることをここに書き留めておく。